

国際交流基金主催 中国「ふれあいの場」大学生交流事業（2025年度）活動報告

下関市立大学 経済学部 3年 児玉姫乃

1. 事業の概要

本事業は、国際交流基金が主催する日本と中国の大学生同士による文化交流プロジェクトである。目的は単なる交流ではなく、互いの文化理解を深め、長期的な信頼関係を築く人材を育成することにある。私は2025年度夏期の派遣メンバーとして選出され、下関市立大学・北九州市立大学・西南学院大学・宮崎公立大学の計6名からなるチーム「Wisterina」のリーダーを務めた。

2. 企画立案（5～6月）

5月より、日中交流イベントの企画書作成を開始した。9月の渡航期間が中国の「中秋節」と重なることから、私たちは日本の“お月見文化”と中秋節を融合した総合型交流イベントを構想した。テーマは「衣食住」。日本文化を視覚・体験・食の三方向から感じてもらうことで、言語に頼らない“体感的な交流”を目指した。しかし、メンバーの大学・専攻・生活リズムは全く異なり、就職活動やアルバイトとの調整も難航した。ミーティングは早朝や深夜に行なうことが多く、全員が疲れを抱えながら進める期間だった。それでも「絶対に妥協しない」という共通意識を保ち、議論を積み重ねた。6月には書類選考を通過し、6名で臨んだ面接も無事合格。ここで初めて「中国でイベントを開催する責任」を現実として自覚した。

3. 事前交流（7～9月）

渡航前のオンライン交流では、Wisterinaが主導して次のような企画を実施した。

- ・藍染体験の事前学習（日本の伝統色・模様の意味を紹介）
- ・日本アニメ・流行語から学ぶ「今」の日本文化
- ・「日本の中に潜む中国文化」「中国の中に潜む日本文化」の相互探究
- ・濟南ふれあいの場の学生による山東省紹介・ふるさと紹介

渡航前に信頼関係を築くことを目的としたが、当初は画面越しゆえの距離感を強く感じた。そこで私自身の失敗をあえて笑いに変えて共有したり、相手の名前を積極的に呼んだり、意見を自然に引き出す工夫を行った。交流を重ねる中で、中国側の学生のプレゼン力の高さや、日本文化への興味の深さを知り、「イベントの質をさらに上げなければ」という危機感が生まれたことを覚えている。同時に、初対面の学生同士で企画を改善し合う空気が生まれたことは、大きな自信につながった。

4. 事前研修

8月には、さいたま市の国際交流基金日本語国際センターにて事前研修が行われた。ここでは、過去に本事業で中国へ渡航した先輩方によるプレゼンテーションや、現地での姿勢やファシリテーションのあり方について具体的な学びを得ることができた。Wisterinaのメンバー全員が対面で集まつたのは、この研修が初めてであった。私たちは、これから活動を進めるうえで「どのようなチームでありたいか」を改めて話し合い、「誰一人欠けてはいけないと思えるチーム」「達成感と同じ熱量で共有できるチーム」「個々の成長を中心から喜び合えるチーム」という三つの目標を掲げた。先輩方の言葉や体験談は、私たちに今必要な姿勢や不足している視点を自覚させ、渡航事前研修がこの事業に臨む覚悟を固める重要な機会であることを強く実感した。



5. 中国渡航と現地交流（9月、山東省济南・山東師範大学）



約一週間、山東省济南市の山東師範大学にある济南ふれあいの場を訪問し、現地学生と交流を行った。まず、中国文化の理解を目的に、切り絵体験や伝統菓子の制作・試食を行った。文化的背景を丁寧に解説していただきながら体験することで、表面的な知識では得られない奥行きある学びとなった。約2万人が学ぶ山東師範大学の学食は、私にとって強い印象を残した。一つの大学がまるで一つの都市のように機能しており、キャンパス内だけで生活が完結する利便性とスケールの大きさに驚いた。学食では、ふれあいの場の学生が常に寄り添い、注文や支払いまで細かくサポートしてくれた。飲み物や食べ物を惜しみなく分け合ってくれる姿からは、その温かさと深い愛情を全身で感じる時間となった。また、山東師範大学の日本語学科3年生の授業に参加し、日本の文化や方言をテーマに、クイズ形式のプレゼンテーションを行った。参加者の皆さんにはとても熱心で、楽しみながら日本について学んでくれた。質疑応答の時間には多くの質問やコメントが寄せられ、互いに学び合える有意義なひとときとなった。メインイベントでは、多くの来場者を迎えて、企画を三つのブースに分けて運営した。イベント準備期間は、気づけば、外の空が暗くなっていたことを今でも鮮明に覚えている。限られた時間の中で誰もが役割を超えて動き、少しの妥協も許さず準備を進めた時間は、最も一体感を持てた瞬間であった。

■ 「衣」ブース：藍染体験

日本の伝統技法である藍染を体験してもらい、色の意味、文様の特徴を紹介。翌日には、自分で染めたてぬぐいを鞄に付けている学生の姿も見られ、交流が形として残ることの大切さを改めて実感した。

■ 「食」ブース：みたらし団子・あんこ

団子作り／抹茶点て体験

中国学生はみたらしの味に驚きを示し、抹茶点て体験には長い行列ができた。食は国境を超えて最も盛り上がる交流であり、「おいしい」の共有が関係の距離を一気に縮めた。

■ 「住」ブース：日本の“夏”フォトスポット

皿倉山の夜景と月の映像を正面に、打ち上げ花火の背景で日本の夏を演出したフォトスポットを設計。日本文化を知ってもらうだけでなく、日本の情緒そのものを体感してもらう意図で作り上げた。

どのブースでも予想以上に参加者が集まり、休む間もなく対応し続けるほどだった。

文化の違いを超えて、笑顔と会話が自然に生まれていく光景は忘れられない。



最終日は、中国・山東省の省都である濟南市にてフィールドワークを実施した。訪問先は、趵突泉、千仏山、山東省博物館の三箇所である。濟南は「泉のまち」として知られ、市内各地に湧き出る清らかな泉が特徴的である。特に趵突泉はその代表格であり、豊かな水量と美しい景観から、古くから多くの文人墨客に愛されてきた。現地で実際に泉を目にすることで、自然と人々の暮らしが密接に結びついている様子を体感することができた。

千仏山では、山道を登りながら石仏群を見学し、宗教的・歴史的背景について理解を深めた。眺望も印象的で、濟南の地形的特徴を実感する貴重な機会となった。山東省博物館では、山東地域の歴史と文化に関する多様な展示が行われていた。特に、高校時代に学んだ孔子や孟子に関する展示に触れた際には、過去の学びが現地での体験と結びつき、学ぶことの意義を改めて実感した。ふれあいの場の学生が日本語で各地の歴史や特徴について説明してくれた。事前に学習を重ね、日本語で伝えようとする姿勢に触れたことで、交流への真摯な思いが伝わり、何よりも嬉しく感じた。今回のフィールドワークを通じて、書物や授業だけでは得られない、現地ならではの気づきや感動を得ることができた。

6. 活動を通じての学び

① リーダーとして調整力の重要性

大学や生活リズムの異なる 6 人をまとめ、日程調整・役割分担・オンライン会議を回すことは想像以上に困難だった。意見がぶつかる場面もあり、全員のモチベーションを一定に保つ難しさを感じた。しかし、この過程で「全員が主役になれる環境づくり」の重要性を学んだ。

② 國際交流は完璧な語学力よりも「態度と熟意」が大切

日本語を専攻している学生たちとの交流の中で、一生懸命日本語で伝えようとしてくれる姿勢に勤勉さと私たちへの敬意や思いやりを実感した。わたしたちも少しでも相手の言語で感想や想いを伝えたいと思い、中国語が堪能でない中でも、間違いを恐れず伝える姿勢を持ちながら共に過ごした。

③ 日本文化を説明できる自分への変化

藍染・抹茶・団子・月見文化など、当たり前だと思っていた日本文化を“言語化して説明する難しさ”を経験した。その過程で、自分自身の文化理解が深まり、日本について語る責任を強く意識するようになった。

④ 「相手の立場で考える力」が飛躍的に伸びた

中国学生の反応や興味を観察しながら、ブースの見せ方や説明内容を即興で変える場面も多かった。これは就職活動や今後のキャリアにも間違いなく活きる能力だと感じている。

⑤当たり前の違いを受け入れる姿勢の重要性

活動を通じて最も強く実感したのは、日中双方が「当たり前」としているものが、想像以上に異なるという事実である。トイレ、学食、寮、図書館といった生活空間から、文化的な価値観や行動様式に至るまで、その違いは数え切れない。しかし私は、それらを戸惑いやショックとしてではなく、むしろ新しい発見として前向きに受け止めることができた。異なる当たり前を尊重し、柔軟に受け入れる姿勢こそが、異文化交流を豊かにし、自身の成長に繋がるのだと実感した。

7. まとめと今後の展望

この日中交流事業は、単なる海外経験ではなく、企画立案、異文化理解、チームマネジメント、実行力のすべてを求められる総合型プロジェクトであった。特にリーダー経験を通して、私は、「人をまとめる難しさ」「文化を伝える責任」「相互理解が生まれる瞬間の喜び」を強く学ぶことができた。今後は、今回の経験を生かし、地域と海外をつなぐ交流事業や国際教育の分野にも挑戦したいと考えている。また、中国で出会った学生とのつながりを継続し、「日中の架け橋」として自分ができるアクションを続けたい。日中交流にご関心のある学生の皆さんには、ぜひこのような機会に積極的にチャレンジしていただきたいと思います。異文化に触れ、互いの理解を深めることで、新たな気づきや学びが得られる貴重な経験となるはずです。[国際交流基金日中 21 世紀交流事業 | 大学生交流事業](#)